

何夙全集

第二十九卷

何夙全集

第二十九卷

岩波書店

昭和四十九年六月二十二日 印刷

昭和四十九年六月二十七日 發行

荷風全集第二十九卷

定價二千四百圓

著 者 永 井 壯 吉

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 岩 波 書 店

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社

目 次

目 次

拾遺	一
俳句	三
和歌	七
漢詩	八
アンケート	九
斷片	一〇
談話	一一
最近の佛蘭西劇	一一
佛蘭西の追懷	一七
追憶の甘さ	二二

草 稿	三
書 簡	二七
續 參 考 篇	一一九
下谷のはなし(『下谷叢話』初出)	三三
杏花餘香	二八五
「葛飾情話」の上演せられるまで	三五二
創作ノート釋文	三六一
手帖釋文	三七五
草稿釋文	四三七
左團次自叙傳	四三五
知友書翰集	四六七
年 譜	五六七
著作年表	六一九

拾

遺

俳句

俳句

消えのこる行燈にとまる螢かな
 飛ぶ螢簾そで垣手水鉢
 片町や螢飛び行くあさ月夜
 螢一つすつと飛びたる簾かな
 後向く女の帯に螢飛ぶ
 墜道〔マツ〕を出れば夜汽車の明易き
 短夜やカンテラ暗き手内職
 短夜や門にうろつく小盗人
 短夜や病伏す妻の咳嗽の聲
 流し呼ぶ揚屋の町の明け易き
 石竹や貸家の椽のくさりたる
 石竹のわけて目に立つ小庭かな

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

明治三二・七『翠風集』

石竹や河原を急く旅の人
 半襟に石竹染めし女かな
 水飯や濡れ椽近く灯をともす
 胡座かいて水飯をめす紳士哉
 夕月や水飯喰ふ小欄干
 水飯を西洋皿に盛て見し
 人もなき座敷の隅の竹婦人
 竹婦人未だ戀知らぬ妹が室
 新聞と竹婦人と置きし坐敷かな
 竹夫人抱く女の手のしろき
 傾城の腹の細さよ竹夫人
 階きざしに石竹植ゑし異人館
 三日月やおりからいかり上ぐるふね
 冬の夜を酒店に夜ふかす人の聲
 風や電車過ぎたる町の角

明治三三 木曜會句會懷紙

明治三六・一一・一六 永井家宛(昭和四三・一〇俳句研究社刊
永井威三郎『風樹の年輪』より轉載)

菊さくやペンキ古びし板がこひ

窓あけて見るやそこらの冬木立

亞米利加の野や冬枯れて三千里

河東忌や雨に聲なき築地川

秋草やむかしの人の足の跡

行春や窓の鸚鵡の案じ顔

たまに來て看るや夕日の冬の庭

冬空の俄に暗しきのふから

木枯も音をやしづめむ今日の空

秋の日の髭削るひまもなかりけり

結直す髮氣に入らぬ暑かな

錢も無く用もなき身の師走哉

中秋散步口吟

灯の見えぬ川岸ばかり月見哉

名月や橋をわたりて橋の上

明治三七・一・一二 永井威三郎宛（昭和四三・一〇俳句研究社刊永井威三郎『風樹の年輪』より轉載）
大正六・九「文明」

大正一四・五・二七『杏花餘香』

大正一五年頃、小松太郎藏扇面

昭和元・一二・二六『杏花餘香』

、

、

昭和二・八・一一『杏花餘香』

昭和二〇・五「柳屋」

、

昭和一一・一〇・一 邦枝完二宛

玉の井や名ばかりめでむ今日の月
櫻にはまだ程もあり雨三日

昭和二・三・二九 相磯勝彌宛

年次未詳

暗き日や花なき庭の雪の下

短冊

赤茄子も夏となりけり耳かくし

短冊

柳くゝる猪牙のへさきや夏の雲

色紙

蜀山が草書に似たり雨の萩

小門勝二藏扇面

打水や櫛落ちてあるきり戸口

後藤杜三藏扇面

春信の紅繪ふりたり窓の秋

安達豊久藏短冊

和歌

邯鄲のゆめよりも猶みじかきは寐るひまもなき契なりけり

昭和一〇年代畫軸

白萩の中おし分けて根本まで月さす影に泣くくつわむし

〃

漢 詩

花影春窗澹欲無 滿庭香霧夜模糊 美人悄寫想思字 紅淚數行都是珠

丙寅春日

畫軸

細水幽花小々亭 詩人佇興倚窗櫺 雨痕涼入庭前竹 一陣清風一點螢

丁卯夏日

團扇

書劍十年唯自憐 不如午夢伴花眠 青雲有志歸虛願 贏得一囊詩酒錢

邦枝君大雅正之 丁卯歲秋分前一日

山田朝一藏色紙

アンケート

「月を愛する人 花を愛する人 雪を愛する人」の間に應じて

花
永井荷風

明治四十二年五月、博文館發行、海賀變哲編『新小説辭典』所收

斷片

求職廣告

JAPANESE general houseworker wants position in small family. Nagai 17 Concord, Brooklyn

一九〇五年七月九日「ニューヨーク・ヘラルド」

談 話

最近の佛蘭西劇

佛蘭西は、昔から特長ある社會劇を出して居る。勿論イブセンなども歡迎されてはゐるが、自國に社會劇の作者を澤山持つて居るので、他國に比べてみると遙かに冷淡であると言つてよい。佛蘭西一般の觀客は調子の異つたイブセン劇よりも、自國の劇作者のを歡んで迎へてゐるやうだ。最近著名の劇二三を紹介してみやう。

△第一に、ポール、エルビユー(Paul Hervieu)である。此作家は、佛蘭西アカデミーの會員で、劇作家の大家である。私の觀た劇に、『迷ひの室』^{ラビラン}といふのがある。それは、離婚後更に又第二の男と結婚した女が、以前の夫と現在の夫との間に立つて、如何に身を處すべきかといふ問題を捉へたものである。

序幕を見ると、その女主人公が、我が夫の到底生涯を托する價值なきを觀破して、その母親と相